
去りゆくキミへ

—。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

去りゆくキミへ

【Nコード】

N6655I

【作者名】

一。

【あらすじ】

ある日、江戸・かぶき町に突然現れた銀髪・紅瞳の青年、ブルー。何かと万事屋の坂田銀時と間違えられるが……。

銀魂と地球へ……のクロスオーバーです。ブルーに地球での暮らしを満喫してもらいたい一身で始まったお話です。

『既視感のもととは意外と身近にある』前編（前書き）

ブルーが銀魂の世界にいます。ブルー以外の地球へキャラクターの登場は少ないと思います。

また、原作同様戦闘シーンを含みます。苦手な方はご注意ください。

『既視感のもとには意外と身近にある』前編

夢の中で静かな声が問う。

愛しそうに、故郷を見せてくれないかと。

だが俺にはその願いを叶えられるほど美しい思い出はない。

俺が黙り（だんまり）をきめこむといっしか声は聞こえなくなるのだ。

俺はしばらくと経たないうちに覚醒した。否、強制的に現実世界に引き戻されたと言った方が正しい。

「銀ちゃん、銀ちゃん、大変ネッツー！」

加減と言うものを知らない夜兎の少女 神楽 は、扉を壊しそうな勢いで開け放つ。

玄関から居間まで煩いくらい響き渡る声に俺はみじろいだ。

「珍しいモノが落ちてたヨ！ふいぎあるか！？それとも新しいヒトガタのカラクリアルか！？」

「だあああー！ー！！うるせえ！だから名称のわからんもんを拾ってくんなくて……え？」

神楽が引きずってきた人形のようなモノと目があう。

パチパチと音が出そうなほど長いまつ毛がゆっくりと閉じられ、そ

して開かれる。紅い宝石が俺を捕らえた。

「そいつは…」

「ちよつ、神楽ちゃん何やってんのオオオ!!」

「落ちてたから拾ったアル。たぶん、最新のカラクリヨ!」

「違うから!その人お客さんだから!」

「…は?」

僕が万屋に向かう途中、ターミナルを眺める人物が居た。

柔らかな銀髪に宝石を思わせる紅い瞳。引きずるほど長い藤色のマント。

この人の周りだけ空間が違う気がした。

困ったように立ちすくむ人を放っておけなくて僕は勇気を出して声をかけた。

「あの、どうかしましたか?」

僕が声をかけると一瞬驚き、すぐに困ったように微笑んだ。

「…この惑星はとても生き生きとしている。」

ドタバタしているこの江戸の町には似つかわしくない落ち着いた声が続ける。

「動物も草木や花も。そして人々も。コンピュータが支配していない世界が本当にあるとは」

「コンピュータに支配？ そういえば惑星とも言ってたな。もしかして宇宙から来た人？ いや、天人？」

「ここは一体なんと呼ばれる所なんだい？」

江戸です。と答えると彼はそうか。と短く答えた。どうやら本当に初めて訪れたようだ。

「あ。」

彼は困ったように微笑んだ。

「参ったな。どうやって戻れるかわからない」

「ええええエエエ！ ま、迷子ですか！？」

僕がそういうと彼は、「そういう誤解をする言い方をしないでほしいのだけど」と苦笑。

「自分でも信じがたいが、気づいたらココに立っていたんだ。記憶がないとかではなくそのままの意味で……」

僕が疑いの目を向けているのに気づいたのか、彼はこう続けた。

「そうだな……テレポーションのような感覚かな」

「……よくわかりませんが、事情はわかりました」

ようは家を探してあげれば良いわけだ。警察に身柄を渡してもいいが、さて、この人の言うことを信じる人はいるだろうか？

否、僕たちのことでさえ疑うんだ。無理だろう。そうなると思える所はひとつしかない。

「ここを真つ直ぐ行くと、”お登勢”というスナックがあります。その2階にある”万事屋銀ちゃん”という所に行つて下さい。2階建てで屋根の上に銀と書いた旗がありますから、すぐにわかると思います」

銀さんならなんとかしてくれると思いますよ。と続けながら、ふと時計を見ると随分と時間が経っていた。

いけないッ、姉上に殺される!!

「僕は寄る所があるのでまた後で会いましょう」

僕は彼の返事を待たずに大江戸マーケットへと急いだ。

「という訳です」

「という訳じゃねえよ、コノヤロー。なんで客が神楽に引きずられてんだ。十文字以内で説明しろ」

「だから落ちてたアル！」

「じゃあ、なんであんたは引きずられてんだ。ん？言ってみ？銀さん怒らないからア」

未だに状況がわかってなさそうな本人に聞いてみる。

しかし、彼はきよとんとしたままで、少し考えるような仕草をしてから、神楽の方を仰ぎ見た。

神楽、いい加減離してやれ。その格好じゃ話せるもんも話せないだろオが。

だが、解放されてなお、この客は神楽を見つめたままだった。

「あれ？神楽ちゃん、頭のソレ何？…というか、ソレあの人のだよ
ね？」

「最新のでじたる機器だと思ったけど、何も聞こえないネ。チツ、
不良アル」

「強奪しといて何その態度ツ！チツって言ったよね？チツって言ったよ
ねエ！？」

「旧式にようはないアル。私を満足させたければ未来の道具を持っ
てくるネ」

神楽はヘッドホンのような物を客に返す。

受け取った彼はソレを耳に装着し、ゆっくりと瞳を開いた。

「すまない…」

彼の声に盛大な違和感を感じる。

気持ち悪いというか、気味が悪いというか。

「僕はこれがないと何も聞こえないんだ。

すまないが、どんな話をしてたのか教えてくれないだろうか？何
故僕はここにいる？」

いや、彼がいるということは目的地には着いたようだね」

万事屋メンバーは固まったまま動けずにいる。その沈黙を破つたの
は神楽だった。

「髪や目の色だけじゃなく、声も銀ちゃんソックリヨ！」

「どこかで聞いたことある声だと思ったら！」
と新八。ああ、だから違和感が。

「ドツペルヨ、ドツペル!!」

「オイイ、それだと死んじゃうからア！皆の銀さん死んじゃうよ！？」

ギャーギャーと騒いでいた俺たちを止めたのはやはり新八だった。

「で、あなたは何故、落…倒れてたんですか？」

「文字が…」

文字？と俺たちは声を揃える。

「読めないんだ。言葉は通じるのに、不思議だ…」

ようは、万事屋がわからなくてウロウロしてたら暑さで倒れたと。

人に聞くにも不審な目を向けられて出来なかつたらしい。

そりゃあ、そんな格好してればなア。

彼の服装は俺たち一般人よりも天人が好みそうな格好だ。

おまけにこの髪と瞳、日本人離れした整った顔。振り向くなという方がおかしい。

「そういえばキミ、迷子なんだっけ？どこから来たの？」

「だから気づいたらここに居たって言ってるじゃないですか！人の話聞いてましたか!？」

「んなこと言われても、そんな漫画みたいなこと信じられるかっての」

「それは…」

新八はどう説得しようか思索するように眼鏡を押し上げる。

「それに別世界から来たなんてどうやって証明できんだア？

宇宙は広い。もしかしたら別惑星から来た無自覚天人かもしれないねえーよ？」

俺がそう言つと新八はだまりこみ、室内にしばしの静寂が訪れた。

それを破つたのは意外にも例の少年だった。

「ここはテラ…地球だろう？」

俺たちが何を言ってるんだという目を向けると彼は続けた。

「僕たちの世界では数百年前に汚染された地球を捨て、人類は別惑星に移住した」

俺たちが返答できずにいると彼はさらに続けた。

「コンピュータによって出生から死亡まで管理された世界。

14歳で行われる成人検査でイレギュラー因子は徹底的に排除される。

それらイレギュラー因子をミュウと呼ぶ」

ミュウ…？

「地球が自己再生をして人が住める状態になるまでは、地球に人が住むことはありえない。

時間を遡ったとも考え難い。なぜなら、僕の知っている時代だけでも、宇宙人との接触はなかったからだ」

だから全く異なる世界から来たことになる。と彼はそう言い切った。

事情はなんとなくわかる。だが厄介なことになった。

何がって、これから起こることに何となく予想がつくからだ。

「じゃあどうするんだ？」

「来た時は突然のことだったんだ。入口や出口があるようには思えないから、機会をうかがうしかないと思う」

「ここに住めばいいネ！」

また何を言い出すのかと思ったら…。

「何考えてんだ。ここは迷子センターじゃねーんだ。もうとっくに定員オーバーだ」

「銀さん、僕からもお願いします！」

おいおい、冗談だろ？

「2人と1匹だけで手一杯だ！もう一人養う余裕なんてうちにはないの！」

俺がそう言い切ると二人は静かになった。

なんだ、意外と素直だな。

俺が感心していると、新八が震えた声を絞り出した。

「考えを改める気はないんですか？」

「だめなもんはダメだ」

「どうして！？困ってる人を助けるのが万事屋の仕事じゃないんですか！？」

「慈善事業じゃねえんだ。タダ働きなんてごめん被るね」

「そんな…」

「お前らの意見なんか聞いてちゃいねえんだよ。これは決定事項だ」

「銀ちゃん…」

少し言い過ぎた感はあるが、こうでも言わないとこいつらはわからねえんだ。そう自分に言い聞かす。

「あんたならなんとかしてくれると思ってたのにッ！！…信じた僕がバカだったんだ」

新八はそう吐き捨てて、赤い目の少年を連れて出ていった。神楽も後を追う万屋にはまた静寂が訪れる。

ふう、やっと静かになったな。

俺はソファーに寝転び目を閉じた。

END

『既視感のもととは意外と身近にある』前編（後書き）

前編はこれにて終了です。お疲れ様でした。

ここまで読んで下さりありがとうございます！

因みに『既視感のもととは意外と身近にある』という教訓は執筆中に実感したことです。

小説を書いてみてわかったのは、本編がアニメに少なからず影響をうけているということ。

無意識で利用してる言葉がアニメの第何話の言葉だったり…。

ちなみに次のお話は後編ではありませんがあしからず。

『よく考えてみると見た目通りの人間のほうが珍しい』（前書き）

桂とブルーの出会いの話。

『よく考えてみると見た目通りの人間のほうが珍しい』

「探せー！！」

「なんとしても見つけ出すんだ！」

「江戸中這いずり回ってでも探しだせ！」

「騒がしいですね。何かあったんでしょうか？」

いつも平和な江戸も、今日はやけに警察が殺気だっていた。
どこを歩くにも警察が目につく。

「大方攘夷派でも追ってんだらうよ。気にするな。空気だと思え」

「それは無理だからッ！」

「銀ちゃん、銀ちゃん！青兄どこ行ったアルか？」

僕たち万事屋一向は定春の散歩のため江戸の街を歩いていたが、新しく入ったメンバーだけがそこにはなかった。

因みに神楽ちゃんが呼んでいる青兄とは、新メンバーのブルーさんのことだ。

「あ？あいつなら最近この辺の地理も覚えてきたし、一人でブラブラしてんだろ。」

「たく仕事もしねえーでどこほつついてやがんだ？お母さんは、そんな子に育てた覚えはありません！」

「ブルーさんも、一番仕事と無縁のあんたになんか言われたくないだろうな」

「銀ちゃんがママだったら、青兄がグレるのわかるアル」

「あ、それ僕も思う」

「お前らよつてたかつて俺を悪者扱いか？よく考えてみる。一見真面目そうな奴が実は犯人でしたア！つて時代なんだぞ？

あいつだって好青年のフリして実は指名手配犯かもよ？」

まさか。ブルーさんはこの江戸に来て間もないし、第一そんなことをするような人ではない。

天然で何かやらかしてはくれそうだが…。

「おおツ！体は大人！頭脳は子供！かもしれないアル！」

あんたらよりはよっぽど中身大人だから！

「あんたら本人いない所で言いたい放題だな」

「バツカ！本人の前で言ったら泣いちゃうだろ。このボケわかる奴の前じゃないと意味ねえんだよ」

確かに収拾つかなくなるかも…。

「あー…でもそんなポケも新しくてよくな？」

「よくねえよー!!」

なんかタリイよ！これ以上濃いキャラ増えてみる、ほんと収拾つかないから。

ちよっとはツツコミの僕の身にもなってほしい。

はあ。ブルーさん何やってんだろ…。

僕は壁に体重をあずけ、弾んだ息を整えた。

何がどうなっているんだ？

銀さん、新八、神楽…。

一体どこにいる？

…だめだ。近くに気配を感じられない。

あるとすれば苛立ち、焦り、不安が渦巻いているくらいだ…。

あの中に彼らはいない。

体重を支えきれずズルズルとその場にしゃがみこむ。

どうして僕は追われている？

…わからない。

とにかく、一刻も早くこの場から逃げなくては。

だが、逃げ続けたことで体力は限界にきていた。

力を使わず逃げるのがこれほどまでに大変だったとは…。

夢中で逃げ続け、辿り着いたのはどこかの路地裏。

最早どの道を通ったかも覚えていない。

屋根の上に登れば何か手がかりが掴めるかもしれない。

この世界で力を使いたくはなかったが、この際仕方ない。

僕は周りに人の気配がないか確認し、瞬時に屋根の上に移動した。

「奴らに追われているのか？」

声の主を見上げるとそこには長髪の青年がいた。

「追われているのかと聞いている」

僕が返事できずにいると更にこう続けた。

「私は幕府の犬ではない。安心してすべてをさらけ出してよい」

「……」

「うむ。そこは”今会ったばかりかだし！”とか”いやいや信用できなから！”

”みたいなツッコミを期待していたんだが……”

この青年を計りかねていると彼が再び口を開く。

「私が何故君に声をかけたかというと、君の能力にとっても興味がある」

見られていたのか……。やはり僕はこの世界でも異端な存在として扱われるのだろうか？

覚悟はしていたが、こんなに早いとは。もう少しくらいはこの町で生活したかった。

「あの素晴らしい瞬発力。私は感動した！」

「……え……」

「はは。謙遜などしなくてもよい。胸を張って良い特技だ」

青年は何度もうんうんと頷き、酷く納得した様子だ。

どうやら不可思議な力だとは思っていないようだ。

「どうだ？この腐った世の中を変えるため、私と共に手を取り合わないか？

逃げの小太郎と言われた私と君が組めば怖いものなどない！」

「その……」

「そうか！やってくれるか？」

「いや、あの…。」

万事屋で働いていると告げようとしたが、途中で遮られる。

「君なら良い返事をしてくれると思っていた！いや、ありがとう。」

「え…。」

「私は桂 小太郎だ。君は？」

「…か、つら？。」

どこかで聞いたことのある名前だ。だが顔に覚えはない。

「僕はブルー。」

「そうか。では、ついて来るが良い。」

彼の後を追いながら、先ほど浮かんだ疑問についてもう一度考えてみる。

桂、かつら、カツラ…？

あ。

「ツラ？」

「ツラじゃない、桂だと何回言わせるんだ、貴様はッ！」
前を歩く彼が勢いよく振り返る。

「ッ…すまない。知人の顔を思い出してな」

「もしかして銀さんの知り合いかい？」

「なっ！ぎ、銀時か？銀時なのか！？」

桂と名乗る男は僕の肩を掴み、前後に揺さぶる。少し痛い。

「ちが…」

「それにしても、気だるげな顔でもなければ、天パでもない。
幼い感じもするし、心なしか背も縮んだような…いや、こっ見下ろ
す感じだった気がする」

「だから僕は銀さんではない」

なおも彼は僕の言うことに耳をかさない。
どうしてこの世界の人は、他人の話しを最後まで聞かないんだろう
か？

「銀髪がそう何人もいてたまるか。銀時が誰かわからなくなるではないか！」

髪の色でしか判別できないんだらうか…。

「それにその声にも聞き覚えが…はッ！生き別れの兄弟か!？」

「だから、僕は万事屋の…。」

「そうか、そうか。それは手厚く歓迎せねばな」

そう言っつて半ば強引に彼の長屋があるという場所に行くことになってしまった。

銀さんの知り合いなら悪いようにはならないだろう。

それに攘夷志士には少しばかり興味がある。

幕府と対立する志士達は、地球政府と対立するミュウとどこか似ている。

彼らに僕らミュウの思いを伝える糸口が見つかるかもしれない。

「この道を行けば目的地までもうすぐだ」

「随分歩くんだね。もうどの道を通ってきたかわからないよ」

いくら記憶力に優れているとはいえ、土地勘とは関係がない。

もしこのまま一人で帰るとするならば、もと来た道に戻るしかない。

歩いて帰るならどれくらいかかるだろう？
そんなことをぼんやりと考えてしまう。

「うむ。攘夷志士たる者、そう簡単に居場所を特定されてはならぬからな」

誰かにつけられたような口振りだが、今まで僕たちをつけてきたような気配は感じなかった。
慎重な性格なのだろうか。

「このわき道を通れば、ほら……」

家と家の狭い通路に案内される。

薄暗く、ゴミが積み上げられただけの通路。

「扉はないようだけど……、他に入り口があるのかい？」

「……ここは、フェイクなので間違えないように。あっちだ」

そう言っただけで彼はもう数十歩歩いた所で立ち止まる。

「ここも同じような感じだけれど……。これも場所を特定できないようにするフェイクかい？」

「そうだ！よく解ったな。なかなか素質がある。さあ、本物はどこだ！？」

「……？」

「敵のアジトをつきとめるテストだ。これも中々必要なスキルだからな。折角の機会なのでやってみよう」

桂は一步後ろに下がり僕を見る。まるで早くしろというように…。だが急に言われても、この世界にまだ馴染んでいない僕には見当もつかない。

あれ？ふと見覚えのある物が視界に入る。あれはたしか、銀さんがいつも見てる

…ジャンプ？

「ここ…かな？」

他に手がかりがなかったので、ジャンプのある通路にしてみる。

「またジャンプか…。そんな軟弱なものを読んでいたら、いつまでたっても立派な攘夷志士にはなれんぞ！」

「銀さんは」迷ったらジャンプ”って言っていたけど…」

「あの馬鹿兄貴を簡単に信じない方が身のためだぞ？ジャンプで世界が平和になるなら戦争などない！まったく、さすが兄弟と言つべきか…」

まだ兄弟だと思われているのか？いや、からかわれている？

「よし！エリザベスを探そう！」

彼は突然そう叫んだ。

「エリザベス？」

「私の大切な仲間だ。是非君に紹介しておきたいんだよ、シルバ」
何繋がり？色繋がり？銀時の弟がシルバって、かなり無理矢理だ…。

「ところで…正解はどこなんだい？」

全くわからないという風に小首を傾げてみる。

「まずはエリザベスだ！もしかしたら私を捜しているかもしれない。
早く見つけてやらねば」

「捜すより待っている方が入れ違いに…」

「一緒に居なければ皆が心配するだろう！指導者は皆の安否を把握
するのも大事な仕事だ」

それには僕は何も言えない。元の世界で同じようなことがあれば僕
は自ら捜しに行くだろう。

ところで…

「さつきからずっと気になっていたんだが…その白いのは何だい？」

僕はその白い物体？生物？に釘付けになっていた。

白い布を被ったオバケのように見えるし、白い巨大ペンギンにも見
える。

先ほどから桂の後ろにピッタリとくっついていてる。

「なっ！エリザベスじゃないかっ！一体どこにいたんだ。え、さっきからいた？」

エリザベスと呼ばれた白い生物はしゃべれないのか、プラカードに文字を綴っている。

見ようによっては桂が一人で話しているように見えるが、二人はあまり気にしていないようだ。

「なんだ、近くにいるなら話しかけてくれないだろうか？」

ん？彼か？彼は私と共に国を変えたいと願う同志で、銀時の兄弟。

レ・ミゼラブル君、略してブルー君だ」

一体どこから訂正すべきか……。 (この世界ではツッコミというのだろっ)

確実に言えるのはからかわれているということだ。 (この世界ではボケというらしい)

エリザベスは納得したように僕の方を見て『ヨロシクな』と言っているようだ。

「エリザベス。彼を長屋に案内してくれ。なんで俺がやらないのかって？少し忘れてしまったな。

少しだからな！断じて完璧に忘れてエリザベスに頼ろうとなんかしてないからな！」

「桂…彼(?)がエリザベスかい？」

すかさずエリザベスがプラカードで答える。

『桂さんと呼べ！そしてエリザベス先輩と呼べ』

「ははは、エリザベスは上下関係に厳しいなあ」

『もう桂さん、新入りにはキツチリ教えないと』

「よし、じゃあエリザベス案内を頼むぞ」

『ついてこい！新入り』

そして僕らはやっとの思いで長屋に向かった。

しかし長屋があったのは僕らが出会った場所に近い所だった。

「みんな聞いてくれ。今日から我らの仲間になるブルーだ」

桂は高らかに宣言した。しかし、皆は話しに夢中で聞いていない。僕たちにも気付いてないようだ。

「人の話を聞けえええ！！」

桂が抜刀すると私語がピタリと止む。さすがというべきか。

「桂さん、もしかしてその方は攘夷戦争に参加してたという万事屋

の…」

「やっと仲間になる決心をしてくれたんですか!？」

いつの間にか数人の浪士に囲まれた。

「いや…あの…」

全員分の期待の眼差しに耐えきれなくて、桂に視線を向ける。

「彼は今日から仲間になる銀時の弟、ディープブルーくんだ!皆仲良くしてやってくれ」

さつきよりも余計な説明が増えている気がするが、訂正したところで誰も聞いてくれなさそうだ。

その証拠に浪士たちが騒ぎだす。

「なるほど兄弟か。確かに銀髪」

「目も赤いな」

「声も似てた気がする」

「でも雰囲気は違うくない？」

「バツカ!兄弟のどっちかがちゃらんぽらんだと、もう片方は真面目に育つと相場は決まってるんだよ」

このままでは収集がつかなくなりそうなので、僕はよろしくとだけ言った。

あとは桂に任せようとしたのだが…。

「ブルーさんよろしくお願いします!」

「桂さんが連れてきた新人ですからね、期待してますブルーさん」

「ブルーさん頼りにしてるっす!」

「最初の紹介ちゃんと聞こえてるじゃないか」

「やだなあ〜桂さん、そんな殺人事件みたいな名前な訳ないじゃないですか〜」

会話を終了させるつもりが益々拍車がかかった気がするのは僕の勘違いだろうか?

桂までも会話に加わって、今正に抜刀しそうな雰囲気になる。

「えっと、桂…さん?ここでは一体何をしてるんだい?」

「ああ…。ここは情報交換場所として使用している。

誰かに嗅ぎ付けられないように特定の場所には留まらないので、次に集まる場所が必ずしもこことは限らないので注意するように」

こちらからコンタクトをとるのは難しいということか。

「よし、では友好の証に君にはこれを」

そういつて桂から渡されたのはキャラクターの描かれた細長い包み。周りを見ると同じような包みを皆持っている。

もちろん桂の後ろにいるエリザベスも同じだ。…彼はどうやって食

べるんだろっ？

「んまい棒サラミ味だ」

味とつくからには食べ物なのだろうけど…。

「これは一体…？」

僕が戸惑っているとかかなり驚かれた。

「もしかして、んまい棒を知らないのか！？エム・エー・ジー・ア
イ・マジで！？」

『マジで！？』

エリザベスのプラカードにも驚きの言葉が書かれているのだろう。
！？という記号が並んでいるときは驚いているときに使っていると
銀さんが言ってた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6655i/>

去りゆくキミへ

2010年10月9日11時52分発行